

ある出征学徒の歌

井上 宏

その写真と添え書きの前で、僕の足は釘付けになつた。平成六年、戦後五十年の節目を控えて、大阪本町の南御堂で開かれた「戦争展」を見た行った時のことだ。出征学徒が皇居前を行進している。セミア色にくすんだ大判のモノクローム写真が展示されていた。その横に短歌が添えられている。

「残りたるページを終へて征きなむと　ベエムの利子論今宵読み急ぐ」

主催者は、向学心旺盛な学生が、学業半ばで戦争にかり出され、おそらく、その多くが戦場に散つたであろう悲惨さを訴えたかつたのだらう。胸を打つ展示である。出典は「昭和万葉集」で、「詠み人知らず」とある。

僕は驚いた。僕はこの歌を知っている。詠み人も知っている。これは、大学時代の労働経済学ゼミナールの恩師であり、アララギ派の歌人でもある内海洋一先生の歌だ。僕は先生に学業のみでなく、結婚の仲人をお願いす

るなど、並々ならぬお世話になつた。そして、この歌にも大きな影響を受けたのだ。

先生がこの歌に込められた本當の心は知らない。しかし、僕は、この歌を、人間の「知に対する欲求」が、いかに止むにやまれぬものであるかを示していると受け取つた。戦場でベームの利子論が何の役に立つたらうか。しかし、取りかかつた以上、その全容を知らずに往くことはできない。「知りたい」、ただそのことのために、出征前の残り少ない時間を捧げる。その姿に僕は打たれる。

何かの目的達成のために勉強や研究をするというの、知の一つのあり方だ。知行合一といって、実行がなければ知には何の価値もないという説にも一理がある。

しかし僕は、人間の本能というものは、そもそも何かの目的のために発生したものではないと思つている。生物進化の過程で、突然変異によって偶然備わつた本能が、生存に有利であつたが、少なくとも不利でなかつたがために今まで存続している。「知りたい」という本能も、そういうものだと思つた。

自分を取り巻いている世界は、また自分自身は一体何ものなのか知りたい。この欲求が宗教を生み、科学を生

んだ。そしてこの本能は今まで人間の発展に有利に働いてきた。しかし、今後もそうであるかは分らない。今や人間は頭でつかちになりすぎて、我が身を滅ぼすとして居るようにも見える。何故か？

どうも、知の欲求が他の欲求の道具に成り果て、「ただただ知りたい」という純粹さから逸脱したためではないかと僕には思えるのだが、どうだろうか。より驚沢したい。より便利にしたい。他者に優越したい。長生きしたい。エトセトラ・エトセトラの欲望を満たす奴隷となり、暴走してしまつたのではないか。

ひるがえつて、僕自身のことを考える。僕も幼い時は純粹な知識欲を持つていたと思つのだが、いつしか、何かのための「勉強」という形に変わつてしまつた。純粹に「知りたい」がための勉強が出来るよつになつたのは仕事を引退してからだ。僕に残された時間は、もつ多くないかも知れない。しかも、この宇宙という本の、未読の頁はあまりに膨大だ。とても読み終えることは出来ないが、一頁でも多く読みたい。それが最近の気持ちだ。

僕にこんな気持ちを起こさせる歌を詠まれた先生は、昨年五月に急逝された。四月末に九十歳を迎えられ、教え子たちがお祝いの会を開いた後だつた。会ではお元氣

で、ユトモアたっぷり話をされていた。その後もしばらく元氣に過ごされていたが、急に体調を崩されたとのことだ。先生は戦時中に思想事件での特高による検挙、召集による出征、そしてシベリア抑留、等幾多の波瀾万丈のなかを生き抜いてこられた。知の人であるが、行動の人でもあつた。学園紛争での経済学部長としての硬骨漢ぶりは有名な。

卒寿のお祝いで、「皆さん、長生きしてください。これからの世の中がどうなるか、見るのは面白いじゃないですか」と言つておられたのが印象深い。九十になられても、なお、好奇心一杯だつた。

この四月二十四日、先生の誕生日に、教え子たちの会「一洋会」で徳ぶ会を開く。先生の奥様・お嬢様も出席されるらしい。僕も出席するつもりだ。

なお、展示会では出征学徒の歌との表示だつたが、実際には京都大学卒業後、住友に入られてからの出征だつた。また、「詠み人知らず」の表示は「昭和万葉集」初版で、内海洋一の名は付されていたものの、巻末で経歴不詳と記されていたためと思われる。その後の版では経歴が掲載されたとのこと。

いつまでも、読み継がれてほしい歌である。

(二〇一〇年四月二十日)